

「地方創生」をテーマにした日本・台湾による国際共修プログラム開発と認証制度

赤池慎吾・岡村健志（高知大学）

概要

2016年以降、高知大学では、地域への理解と愛情、地域で働きたいという志を持つ学生を育成し、「地方創生推進士」として認証してきました。2024年3月末時点で、合計274名の地方創生推進士が誕生し、行政機関や民間企業、起業家など高知県・全国で活躍しています。近年、農山漁村であってもグローバル化が急速に拡大しています。足下の地域から世界に視野をひろげ、地域実践の共有と双方向型の国際共修により、人材育成から産業振興、高知県そして海外の持続可能な発展に貢献する人材の育成が求められています。

本稿は、「日台大学地方連携及び社会実践連盟」（以下、日台連盟）を基盤とした日本と台湾による国際共修プログラムの意義を検討する。また、高知大学が新たに取り組む「グローバル創生推進士」を紹介し、今後の学生認証制度についての材料を提供したいと考えています。

「地方創生推進士」から「グローバル創生推進士」へ

過疎高齢化・人口減少など「課題先進県」といわれる高知県。2010年から2020年の10年間で、人口76万4,456人から69万1,527人に減少し、年間約1%という急激な減少が続いている。高知大学では、地域への理解と愛情、地域で働きたいという志を持つ学生を育成し、「地方創生推進士」として認証してきました。称号を得るには育成科目18単位の修得が必要です。講義に加え、地域での実習、経営者や行政機関のもとでのインターンシップなど現場での学びを重視しています。2024年3月末時点で、合計274名の地方創生推進士が高知県・全国で活躍しています¹⁾。

そして近年、外国人技能実習生や外国人観光客の増加などによる多文化共生社会の進展、すなわち、グローバル化の影響が、私たちの足下の高知県にも急速に拡大しています。グローバル化と、人口減少・高齢化といった問題が複雑に進む高知県において、地域レベルからの国際アジェンダ（SDGs等）の推進や諸外国の地域社会等との関係構築によって、「グローバル」と「ローカル」の双方向的な視点から地域の国際化推進に貢献できる人材が求められています。そのための新たな挑戦として、高知大学では、「グローバル創生推進士」を立ち上げました。



高知：世界と繋がる自分



台湾：「地方創生」最前線

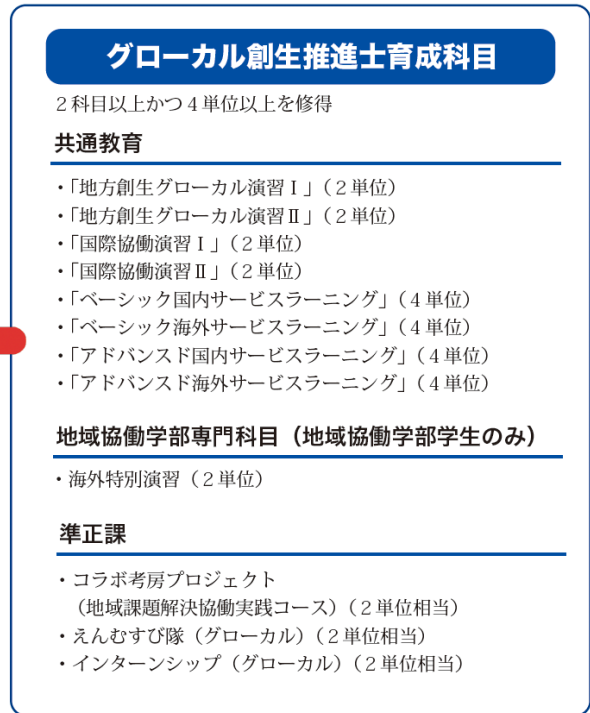
図 日台連盟で実施している教育プログラム

「グローバル創生推進士」の人材像

「グローバル」(Global) はグローバル(Global)とローカル(Local)を組み合わせた言葉です。地方創生推進士に認証された学生が、国際的な視点から地域と協働し、国内・海外の地域課題の解決に取り組んだ証として、そのプロセスで育んだ「世界と地域を繋ぐ力」を証明する称号が、高知大学の独自認証である「グローバル創生推進士」です。

グローバル創生推進士育成科目は国内・海外の「地域」をフィールドにして、国際学生と共に地域で協働するという趣旨のプログラムです。同年代の世界の若者と共に地域に飛び込み、仲間と共に、地域課題解決に挑戦することを重視します。

称号を得るためには、地方創生推進士育成科目 18 単位の修得に加え、4 単位のグローバル創生推進士育成科目の修得が必要です。台湾、インドネシア、イタリアなど海外協定校と連携した国際プログラム等を正課科目として、高知県内で実施する「えんむすび隊」(ボランティア活動)やインターンシップを準正課科目として設定しています。今後、さらに正課科目・準正課科目を拡充していきます。



地方創生推進士

地域への深い理解と愛情を証明する称号



グローバル創生推進士

“世界と地域を繋ぐ力”を証明する称号

図 「グローバル創生推進士」を目指すカリキュラム

高知の足下からグローバルを考える

「ここには何にもないからね」。これは、学生が地域を訪問した際に、何度も耳にする言葉かもしれません。私たちのフィールドは観光地ではありません。名所旧跡やインスタ映えする飲食店・スポットは少ないかもしれません。しかし、そこには人々の暮らしがあり、自然と歴史を活かした産業が営まれ、そして地域の繋がりが確かに存在します。高知大生と国際学生が共に地域を理解し、地域課題解決に向けた実践を通じて、「何もない」から「ここにしかない」地域の価値や魅力を考えていくのがプログラムの目的です。

高知の名物であるカツオのたたき。これを釣っているのはインドネシアからの漁業実習生ということを知っていますか？2000年以降、インドネシアからの漁業実習生の受け入れを開始し、現在もインドネシア人が高知のカツオ一本釣り漁を支えています。そのインドネシア人が母国でどのような暮らしや産業を営んでいるか、想像したことはあるでしょうか。皆さんの食卓にもグローバルを考えるヒントがあります。

現在、国内需要が落ち込む日本では、全国各地でインバウンド観光（外国人旅行者）の誘致が繰り広

げられています。2023年5月、台湾と高知県を結ぶ定期チャーター便が就航し、台湾から観光客が増えました。台湾の人々は高知のどこに魅力を感じ、なぜ高知を選んだのでしょうか？ ここにも「グローバル」な視点で高知の魅力を考えるヒントが広がっています。

国際共修から地域の国際化推進へ

グローバル創生推進士の育成プログラムは、高知大生と国際学生が共に地域課題解決に資する力を身につける国際共修だけではなく、地域住民と協働することによる、地域の国際化推進も目指しています。

地域住民は、高知大生・国際学生の活動や意見に直接触れることで、地域にしながらグローバルな経験を直接体験することができます。これまでの実習地では「ヒジャブやハラール（イスラム法で合法なもの）への理解が深まった」、「地域の魅力を伝えたい」、「外国語で話してみたい」などといった声が地域住民から聞かれました。住民の意識変化を実感しています。

これらは、高知の足下から「グローバル」を考える一例です。国際学生、地域住民と学び合う中で見えてくる高知の課題や魅力について、「グローバル」な視点で考えてみましょう。

高知と台湾で学ぶ「地域」と「世界」の視点

大学に進学したばかりの新入生は、「将来、国際協力の仕事をしたい」「国際学生と交流したい」「農山漁村の現状を知りたい」という夢や期待を抱いているでしょう。グローバル創生推進士育成科目は、全学部・全学年の学生を対象にしており、参加目的も様々です。

しかし、外国語習得や文化交流を主目的に設定したプログラムではありません。国内・海外をフィールドに、文化や宗教が異なる国際学生と共に、使用言語は英語という環境に身を置きます。

自分自身の体験と仲間と協働しながらフィールドワークを通して地域を考え、理解し、持続可能な地域づくりに何が出来るのかを考えるプログラムです。

また、国内・海外のどちらかではなく、国内と海外のどちらも体験することができる双方向型プログラムという点が特徴です（原則、海外実習は国内実習を修得していることが条件です）。高知県で得た学びを海外でさらに伸ばすため、海外で得た言葉や文化の違いを高知県で活かす・深めることができます。

履修を希望する学生には、主体的かつ根気強く地域を探求する姿勢、国際学生と積極的に交流する姿勢、地域に対して敬意を持って接する姿勢が強く求められます。グローバル創生推進士にボーダー（境界）はありません。国内・海外の「地域」が私たちのフィールドです。

事例紹介：「地方創生グローバル演習Ⅰ」

本プログラムには、2019年に国際学術交流協定 MoU を締結した国立高雄科技大学、2022年に MoU を締結した国立台湾海洋大学から学生が参加したプログラムです。高知大学の学生が暮らす高知県で、文化

や宗教、考え方の異なる国際学生と共にフィールドワークを行い、改めて私たちの住む高知県について考えます。ここでは、2023年8月20日～9月4日（全16日間）に実施した実習の様子を紹介します。

参加者は高知大生10名、台湾学生14名、インドネシア学生6名というバラエティーに富んだメンバーが集まりました。実習地は高知県安田町と黒潮町の中山間地域です。プログラムでは、まず、地域を知ることから始めます。農作業や自然体験、郷土料理など自分の体験から地域理解を深めていきます。また、フィールドワークを通じて、「なぜ条件不利地で農業を続けるのか」「高齢者の「生きがい」は何なのか」「コミュニティ活動の運営方法」などなど、国際学生から矢継ぎ早に質問が出てきます。日本人学生は、英語での通訳さらには自分の意見を英語で返します。言葉の壁に阻まれて上手く伝えられない、積極的な国際学生を前にして自分の意見が言えないという経験もあるでしょう。実習で得た学びは、地元報告会等を通じて、自分たちの考えや経験を地域の皆さんにお伝えします。毎年、報告会では、別れを惜しんで涙する学生や地域住民と抱き合う姿が見られます²⁾。

こうした高知県にしながら国際的な視点で地域を考え、自分の意見を他者に伝える。それが国内実習で目指す「グローバル創生推進士」の学びの形です。さあ、国際学生と一緒に高知県の魅力について考えてみましょう！

参考情報 ULR

- ・ 地方創生推進士：https://www.kochi-u.ac.jp/cersi/tsi/tsi_chihosousei.html
- ・ グローバル創生推進士：<https://www.kochi-u.ac.jp/information/2023120400015/>

学生の声：古谷展久さん（地域協働学部2年生）

2024年3月、グローバル創生推進士の第1号が誕生しました。国内実習と海外実習（台湾・インドネシア）を修得した古谷さんの経験をご紹介します。

「最も印象に残っているのは、初めての海外実習となった「地方創生グローバル演習Ⅱ」です。協定校である台湾・国立高雄科技大学の学生と夜遅くまで、最終発表に向けた議論と準備を重ねました。英語を使った国際学生との交流では、どうしても言語の壁がある。限られた自分の語彙力で、相手への伝え方を工夫しました。

実習期間中は時間が限られていて、とにかくしんどかった（笑）。今、振り返ってみると、実習前の私は「地方創生」を人口減少という一側面でしか捉えていませんでした。その対策も、どうすれば地域の人口が増えるかばかり。国内・海外の実習で国際学生とともに地域に向き合ったことで、人とのコミュニケーションから新たな課題を考え、その対応につながる手法を創り出すという意識がより強くなりました。

最近、グローバル創生推進士の取り組みが活きたと感じたことがあります。学部実習で地域誌『いなぶっく』の作成に取り組んでいます。その中で、地域住民と学生との間で地域への想いや表現方法（言葉やイントネーション）に違いがあることに気が付き、住民目線で考える大切さと、それを伝える工夫が必要であることを学生同士で議論することができました。海外での経験が、今自分が立っている高知

で活かせています」。



図 2023年2月台湾実習のフェアウェルパーティ（左手前が古谷さん）

注・引用文献

1) 川竹大輔(2021)「深度了解並且珍愛地方的證明 高知大學之「地方創生規畫師」」, 臺日聯盟電子報、Vol. 1. URL: https://tja.center/zh-TW/newsletter_units/10

2) 本プログラムの教育効果については、下記を参照ください。

赤池慎吾・岡村健志・李筱倩、陳怡君、劉文宏、黃愛玲（2024）「日本學生在學生交流中學到了什麼？有什麼成長？以高知大學「地方創生 GLOCAL 演習」為例」、臺日聯盟電子報、Vol. 9.

URL: https://tja.center/zh-TW/newsletter_units/78